日蓮聖人教学における本門と観心

庵　谷　行　亨

日蓮聖人教学において、本門という場合二種の概念がある。その一はいうまでもなく十四品本門であり、他の一は従来日蓮教学史上、文底本門・観心本門と称されるものである。ここにいう本門とは後者を指す。文底本門とは『開目抄』のいわゆる文底義に、観心本門とは『観心本尊抄』・『副状』・『十法界事』・『立正観鈔』等の観心義に由来するものであろうと思われる。この本門義は特に『観心本尊抄』第五重の三段における「本門」の釈義ともされ、この三段が本門三段・本法三段・観心三段等と呼称されるゆえんでもある。

聖人の独自な本門義が形をとってあらわれるのは文永八年の『十章鈔』、同九年の『開目抄』あたりがその始めであろうと思われる。『十章鈔』（四八九頁）では一念三千の義分を明かすなか、真実の依文判義を本門に置かれるのであるが、これは『開目抄』（五三九頁）の文底本門・本因本果法門に通じており、『本尊抄』本門義の萌芽と考えられる。『開目抄』の文底秘沈の文は一念三千の法門を論じたもので本門について述べたものではない。ところが聖人においては一念三千と本門は密接不可分の関係において展開され、台当一念三千を理・事、迹・本に配当された弘安元年の『富木入道殿御返事』（一五二二頁）はその著名な例と考えられる。この意を藉りて『開目抄』の文を拝見すると、本門は寿量品の文の底に沈められているということになろう。文底本門の語の出るゆえんである。さらに『開目抄』（五五三頁）にはいわゆる本因本果法門説示の文がある。本門の発迹顕本によって本因本果が明かされ、そこに真の十界互具・百界千如・一念三千が実現するとされる。先の文底本門が抽象的であるに対し、ここでは発迹顕本という具体性の中に本門義を示し、これを本因本果の法門とされている。このような聖人独自の本門義が、文底本門は経に、発迹顕本は教にそれぞれ即して叙述されていることに注意しなければならない。経は教に通ずる故に、本門は通途の本門の意と同様、教の世界を離れない。更にこの本門が常に一念三千と関連しつつ論じられていることも重要な

意味を持つている。文底本門では一念三千の法門を、発迹顕本では真の一念三千をそれぞれ本門義顕説の契機あるいは重要要素とされている。これはほかでもなく、聖人教学の中心が本門にあり、一念三千の成仏をもつてまことの成仏とされることからも当然といえる。先にあげた『富木入道殿御返事』に一念三千と本迹を関連づけ、迹門の一念三千、本門の一念三千と説示されるゆえんである。本門の問題が一念三千の問題と不可分の関係にあることは言うまでもない。

叙上の本門義が遺文上に高揚して叙述されるのは『観心本尊抄』である。『観心本尊抄』における初出は「此本門肝心於三南無妙法蓮華経五字」……」(七一二頁)の文であり、これに類似する用例は以下「本門寿量品本尊」・「本門本尊」・「本門釈尊」・「本門四菩薩」、第五重の三段における「本門」、あるいは本門に在世と末法之初を指摘し、脱と種、一品二半と題目五字を説示されている文等がある。このような本門の概念には教格性・現実性が認められ、教格性は理の普遍性と人格の教導性において五字を闡顕し、現実性は色読・受難の宗教的体験において七字の世界を活現する。教的概念の範疇にありつつも本門に五字とともに七字を論ずるゆえんである。本門が観に即する教であるゆえに本門の肝心は「南無妙法蓮華経五字」と表記されるのである。あるいは七字の観心において本門の理(五字)が現成されるともいえよう。このような聖人の本門義には一念三千・題目五字七字・本尊・四菩薩等の重要な要素(問題)が有機的に関連している。したがつて教の世界にありながらも単なる教説ではなく、そこに如来の意志・如来の人格・如来の行動が内含されている。本門の一念三千が仏種、題目が事行等と表現され、「大難又色まさる」(『富木入道殿御返事』一五二二頁)ゆえんである。末法本門[1]・内証本門[2]とはまさにそれを意味している。即ち末法とは如来の意志の方向であり如来の行為の場(志向された時間・空間)である。内証とは如来の御意(本願)であり人格の教格化(五字)である。

叙上の如き聖人独自の本門義は聖人独自の観心の問題と密接に関連している。

台家の観心に種々ある中、聖人が問題とされるのは約行観であり、その中でも一念三千が重要な問題となつている。それらについては『開目抄』(六〇七頁)や『富木入道殿御返事』(一五二二頁)等に詳しい。特に後者では一念三千の観法に理・事、迹・本の分別を行ない、事一念三千、本門一念三千を日蓮の一念三千観法と結論づける。この分別の規準は『止観』所説の三障四魔(大難)である。あるいは建治二年の『事理供養御書』(一二六二頁)にも、先の大難と同様、身命を捧げるところに観心の意味を示されている。このようなところに聖人の観心概念の重要な要素があると考えられるので

ある。

『観心本尊抄』題号の観心については諸説を見るが、『観心本尊抄』第二十九番問答の答文に台家迹面本裏を述べ、「但論二理具一事行南無妙法蓮華経五字竝本門本尊未二広行一之」（七一九頁）と表現されたのは本尊義に動勢を付言されたもので、題号の本尊を釈する上で重要な意味を持つものと考えられる。即ち静的対象物としての本尊ではなく、行為の場における本尊のゆえに観心本尊とされるのである。文中に「本門本尊」の用例を見ながらも、題号に「観心本尊」とされたのは深意あるところである。

さらに『副状』（七二一頁）には「観心の法門」を「日蓮当身大事」、「此事難多答少」、「未聞之事人耳目可レ驚二動之一歟」、「仏滅後二千二百二十余年未レ有二此書之心一」、「不レ顧二国難一期二五五百歳一演二説之一」と、身命に及ぶ未曾有の法門であると述べられている。

以上を要約すれば、観心とは、大難興起と共にあり、身命に及ぶものであり、事的であり、行為的であり、その法門は未曾有のものであるということになろう。即ち聖人の観心は本門の世界における身命をかけた行為であるということになる。換言すれば、本門の発動、本門の動勢、本門の行為的場面が観心である。本門は如来の主体性の中にある。その本門の理が主体性実現としての事の世界に展開されるのが観心にほかならない。日輝和上が『一念三千論』において「当家観実通二色心一……別論レ之観レ身為二正意一」（充全三―二〇六頁）と、観心を観身と釈されたのもこのゆえであろう。

さて両者の関係は一念三千の説明においてより一層明瞭となろう。一念三千には本門の教概念と観心の行為的概念が融合している。一念三千仏種・一念三千珠という教でありつつ、事一念三千、三諫一念三千[3]、大難一念三千[4]という観心でもある。ここに台家の観法を出拠とする一念三千の教（仏種）への飛躍と観心への逆転換がある。「五字七字」、あるいは「南無妙法蓮華経五字」という教即観、観の教格的表現も、このような一念三千が五字の本質であることに由来する。

ゆえに、本門は観心の場においてのみ本門であり、観心もまた本門を離れて観心たりえないのである。

以上、極めて大雑把に日蓮聖人独自の本門と観心について述べた。この問題については、四重興廃等の仏教思想史上の問題をも考慮に入れて考えねばならないことは言うまでもない。それらをも含めての詳論は今後の課題としたい。

1　『観心本尊抄』七一五頁、「本門序正流通倶以二末法之始一為詮。在世本門末法之初一同純円也。」
2　『観心本尊抄』七一六頁、「我内証寿量品」
3　『撰時抄』一〇五三～四頁、「余に三度のかうみゃうあり……」
4　『富木入道殿御返事』一五二二頁、「一念三千観法二あり……」